

## 『ボズの素描集』

(その六)

C. ディケンズ 作

藤 本 隆 康 訳

——情 景——

## 第十五章

## 早朝の駅伝馬車

よく思うのだが、<sup>ボウスト・シエイズ</sup>小型駅伝馬車で休みなく旅を続けるとすると、いったい何か月身体が持つものだろう。それから推して是非とも知りたいのは、早朝の駅伝馬車を乗り継いで休む間なく旅をする不幸な旅人の辛抱の限度である。朝の四時に、人の休息や平安や心を破ること——断食を破る（朝食‘breakfast’を原義通り解釈したもの）のはまったく別の話である——に比べれば、身体を破る車裂きの刑など高が知れている。そしてイクサイアの受けた罰（ギリシャ神話で、ゼウスの妻サイアンはゼウスのために、永遠に回転する）——ついではながら、彼は永遠の回転の神秘を身をもって明らかにした唯一の人物である——などは、駅伝馬車の与える業苦を前にしてはまったく形なしであろう。もしわれわれが、聖なる大義において血が湯水のごとく流され、人間が草のごとく刈り取られた往時の権勢を誇る聖職者であったとしたら、われわれの宗旨に従うことを頑に拒む誰か特に手に負えない異端者を、じっと機会を狙って捕え、昼夜休みなく旅するある小さな乗合馬車の内部席をその不信心者のために予約し、残りの席は

少しばかり咳をしたり唾を吐いたりする太った者たちにあてがい、その男に最後の旅立ちをさせたことだろう。そしてあとは、給仕、宿の亭主、御者、車掌、靴みがき、女中、その他旅にはお馴染みの者たちに、それぞれが適当と考える拷問を容赦なく加えさせればいい。

急遽旅をせよとの命を受けて必然的に生じる難儀を経験しなかった人がいるだろうか？ 仕事先から通告を受ける——行き先、相手お構いなく——即刻出発してもらわなければならないというわけだ。通知を受けた人とその家族は、立ちどころにてんやわんやの興奮状態に陥る。急使が直ちに洗濯屋に派遣される。誰も彼もがあたふたと動き回る。当の本人は、自分が偉くなったという気持ちを隠そうにも隠せず、馬車の席を予約するために出札所へと駆け出して行く。いざ着いてみると、自分が取るに足りぬ人間であることを、まず痛切に思い知らされる——出札所の従業員は、どこの誰が町を離れようと思ったことではないし、また百マイル余りの旅が何だと言わんばかりに、涼しい顔をして落ち着き払っている。中に入ると、そこはかびたような部屋で、馬車旅行の大きな宣伝ビラが装飾よろしく何枚か貼られている。大きく、不恰好な荒木のカウンターによって部屋の大半が囲われており、柵はないが巡回動物園の小動物を入れる檻に似た壁ががいくつか設けてある。五、六人の客が茶色の紙包みの運送を「託し」ていて、係員の一人がその包みを例の壁がんにいかにもぞんざいな態度で投げ込む。予約に訪れた人は、それを目にして朝買いこんだ新しい旅行かばんのことを思い出して、かなりの当惑を覚える。ポーターたちはみな アトラス （ギリシャ神話で、神々に反抗した罪により生涯、天空を双肩になうよう運命づけられた巨人。） よろしく、肩に大きな荷物を背負って威勢よく出入りしている。当の客は、必要な問い合わせをするために待っている間、この仕事に就く前は出札所の所員たちは、いったい何をしていたんだろうと考える。所員の一人はペンを耳にはさみ、両手を腰のうしろに回して、ナポレオンの当身大の肖像のように暖炉の前につっ立っている。また別の所員は、帽子を半分ずらし、得も言えぬほどしゃくにさわる沈着振りで、乗客の名前を名簿に書き込んでいる。しかもこの人でなしは口笛を吹くではないか——まさかと思える

が本当に吹くのである——客が、遠くホリヘッド（ウェイルズのアングルシー島の北西端にある港町。）までの屋上席の運賃——おまけに凍付くような寒空を旅するのである——を聞いているというのにである。この連中は、明らかに孤立した人種であり、他の人類に共通して見られる思いやりやなさを持ち合わせていないことは明白である。予約に来た人物は、やっと自分の順番がきて、運賃を支払い、震えながら尋ねる——「朝何時に来なければならないでしょうか？」——「六時ですよ」と口笛男は答えて、客が手放したばかりの1ポンド金貨を机の上に置いてある木皿にぞんざいに投げ入れる。「それに遅れるよりゃ、早めにな」と焦げたような色のズボンをはいた男が付け加える。世間の人間がみな五時に床を離れるのが当たり前といったふうに、いかにも落ち着き払って言うのである。客は通りに引き返し、家路を辿りながら、人間は習慣によってどこまで残酷な心になっていくのだろうか、つくづく思うのである。

この世で何よりもみじめなことが一つ考えられるとすれば、それはもう間違はなく、ろうそくの灯りで否応なしに起こされることである。それを疑う人は、出発の朝痛い目に会って自分の間違いを痛切に思い知らされるであろう。前の晩、四時半に起こしに来るように厳重に命じる。眠るといっても、夜通し一度に五分ほどのうたたねばかり。教会の大時計の小針が、文字盤の数字の上をつぎつぎと驚くほどの早さで駆けめぐる恐ろしい夢を見て、突然はっと目が覚める。やがて、ぐったりと疲れて、次第に快い眠りに入る——頭の中はこんがらがっていく——一晩中、自分を置いてきぼりにして目の前で「出発」していた駅馬車の姿がだんだんとかすんできて、すっかり消え去ってしまう。一瞬、いかにも手慣れた鞭さばきを見せて、巧みにさっそうと馬を御している自分——次の瞬間、右側の先頭の馬に、デュークロー風に鞭をくれる。またすぐに、自分は外套にびったりと身を包んで、内部席に収まっている。そして車掌をしているのが昔の学友だとふと分かる。夢の中でも、その学友の葬儀に参列したのを覚えている。やがて完全に忘却の状態に陥り、そして新たな世界に入るかのように、奇妙な幻想によって呼び覚まされる。自分は、トランク製造人の徒弟になっている。どうして、なぜ、いつから、

何のためにそんなことをしているのかいちいち訊くことはしないが、ただ自分が徒弟になって、旅行鞆のふたに裏地を張っているのである。裏の店のあの丁稚、いまいましい奴だ。何てやかましく打ち続けるんだろう。／——トン、トン、トン——こりゃ大変勤勉な丁稚に違いない。／ もう三十分も仕事の音が聞こえている。ずっと休みなくつちを打ち続けている。トン、トン、トン、また聞こえてくる——話をしているぞ——何て言ったんだろう？ 五時。／ 眠けに必死に逆い、ベッドの中ではたと身を起こす。幻はたちどころに消える。トランク製造人の店は自分の寝室である。もう一人の徒弟は、寒さに震える召使で、ものの十五分、主人を起こそうとして、自分のこぶしか扉の羽目板のどちらかを傷つけかねない勢いで、甲斐もなく扉を叩き続けていたのである。

当人はあたふたと着換に取りかかる。平台の、芯が長く燃え残ったろうそくがゆらゆらと投げかける灯りでは、自分の欲しいものがあるべき場所がないということが何とか分かるだけである。そして、先夜、気もそぞろの状態ですーツの片方を入念に荷造りしてしまったため、少しばかり余分な時間がかかってしまう。しかし、間もなく身じたくは整う。こんなときに細かいことを気にすることはないし、顔は昨晚のうちに剃っているからだ。そこで、うね織りラシャの大外套、緑色の旅行用ショールを身にまとい、右手にじゅうたん地の旅行鞆をつかんで、家族の誰も起こさないように、そろそろと階下に降りる。そして、コーヒ一杯ぐらいは飲んで行こうと、家族の共同居間（この居間は、何もかもが場違いなところに置かれ、夕食に食べたパンのくずが散らかっていて、殊さら居心地良く見える）に、ちょっとの間足をとめたあと、玄関の扉の鎖とさし錠を外して、やっと通りに出る。

霜解け。こんなみじめなものはない。／ 霜はすっかり解けている。遠く見通しのきくオックスフォード通りを眺めると、ガス灯が濡れた舗道に物悲しく光を映している。そして辻馬車や乗合馬車でもあればと念じるが、その願いを叶えてくれるようなものは、何一つ通りに見受けられない——御者までが意気を殺がれて家にもどっているのだ。冷い雲が静かに、絶え間なく地面

を濡らし、この調子ならまる一日降り続きそうだ。霧が屋根や街灯柱の上に垂れ込め、目に見えぬ外套のように身体にまとわりつく。水がすべての家の地下勝手口に「浸水」し、下水管は破れ、天水桶から水があふれている。溝の濁流は懸河の如く流れ、ポンプの柄がひとりでに下がる。市場の荷車につながれた馬が倒れるが、助け起こす者はいない。巡査は、まるで粉ガラスを入念に振りかけたような姿をしており、あちこちで牛乳配達の花が、滑べらないように両足にひもをまいて、とぼとぼと歩いている。「家で眠らない」(住み込みでない)で、家の外でもおちおち眠れない(間借りかなにかをされていて早朝から勤めに出なければならないため。)少年たちが、店の扉を激しく叩くが主人の目を覚ますことができず、寒さで泣き声をあげる——氷と雪と水がいっしょくたになって舗道に二インチほど積もっている。身体を暖めるために速く歩こうとする者はいない。速く歩いたって身体を暖かく保つことなどできるはずもないのだ。

金十字旅館(既出)への途中、ウォータールー・プレイスをとぼとぼと歩いていると、五時十五分の時報が鳴り、そのとき初めて、自分が一時間ばかり早く起こされたことに気付く。引き返す時間はない。開いている酒場もない。仕方なく先に進むが、歩いても自分や周囲のすべてのものに対して、心がうつうつとして楽しまない。駅馬車発着所に辿り着いて、バーミingham行きハイフライアーの急行馬車でもいないかと馬車置場をもの欲しそうに眺めるが、多分とうに飛び去ったに違いない。馬車の類いのどんな乗物の出発準備も、いっこうに始まりそうにないからである。出札所におぼろりと入って行くと、ガス灯が輝き、炉の火があかあかと燃えていて、外との対照で、実に居心地よく見える——と言っても、冬の朝五時半に、居心地よく見える所があるとしての話である。例の出札係が、昨日いた場所からまったく動いていないかのように、同じところに立っている。この男が言うには、馬車は馬車置場の方において、十五分ほどでこちらに回されるということなので、当の客は鞆を置いて、「酒場」に足を向ける——身体を暖めようなどと馬鹿げたことは考えない。そんなことははなから諦めているからで、ただ熱いお湯割りブランデーを少し飲まんがためである。目的は叶えられる——やかんのお湯が沸騰するまで

待たされて、／＼ でき上がるのは、馬車の出発時間のきっかり二分三十秒前である。

あつあつのブランデーを一口すすったかと思うと、聖マーティン教会の尖塔から六時を告げる最初の鐘の音が響いてくる。二秒でまた発着所にもどり、酒場の給仕は残されたブランデーをそれとほぼ同じ早さで飲み干して御満悦の体である。馬車が引き出され、馬がつながれる。車掌と二、三人のポーターが荷物を積み込み、息もつかせぬほどの速さで、発着所の階段を上り下りしている。少し前まで閑散としていた場所が、今では大変な賑いようだ。早出の朝刊売りがやって来て、『『タイムズ』だよ、旦那、『タイムズ』だ、  
「へい、『クロン（『モーニング・クロ』紙のこと。）」、『クロン』、『クロン』、『ヘラルド（『モーニング・ヘラ』紙のこと。）」はいかが、奥さん、  
「興味津津の殺人がのってるよ、旦那、  
「結婚不履行の面白い訴訟がのってるよ、御婦人方」といった呼び声で、四方八方から客を攻めたてる。車内席の乗客たちはすでに中の席に入っていて、自分以外の屋上席の乗客たちは、舗道を行きつもどりつして身体を暖めようとしている。長く垂れた髪に翼が降りかかり、それが砂糖づけにしたねずみの尻尾みたいになってしまった二人の若者、よそよそしく、気むづかしい顔をした痩せぎすの婦人、同様の老紳士、帽子つきの外套をまとった士官気取りの正体の分からない人物といった連中が屋上席の連れ合いである。乗客のすべてが、大きくてごわごわしたショールをあごの上にまでまもっていて、牧神の笛（7本の草を連ねた笛で、首に巻いたえり巻きで顔の前に支）（えて吹く。ギリシャ神話の牧神の笛にちなんでつけられた。）を一節吹いてもおかしくない恰好である。

「衣類を片付けてくれ、ボブ」と、このとき初めて姿を見せた御者が言う。彼はごわごわした青色の外套を着ているが、背中のボタンというのが一度に二つ見れないほどひどく離れてついている。「さあ、みなさん」と、乗客名簿を手にも、車掌が叫ぶ、「もう五分遅れてますよ、／＼」乗客たちがとび乗る——二人の若者は石灰がまよろしくもうもうと湯気を立て、老人はぶつぶつ不平を言う。痩せた若い婦人が、引っぱられたり、押されたり、人の手を借りたり、すったもんだの末に屋上に上げられるが、彼女は、もう二度と下り

れないわよ、と自らの確信を厳かに表明してその親切に報いる。

「発車オーライ」と、ついに車掌が叫ぶ。馬車が動き出すと彼はとび乗って、すぐさま角笛を吹き鳴らし、肺の丈夫なところを実証してみせる。「勝手に進ませろ、ハリー、手綱を放すんだ」と、御者が叫ぶ——そして、朝の天気も「オーライ」と告げているかのように、われわれは軽快に旅立つ。そして、われわれは旅の終わるのを切に望むのであるが、あるいは読者諸氏もそれと同じ気持ちで、ずっと前からこの素描が終わるのを待ち望んでおられたことであろう。

## 第十六章

### 乗 合 馬 車

誰しも認めるところであるが、公共の乗物は娯楽と観察の機会を広くわれわれに与えてくれる。ノアの箱舟——これが記録にあるもっとも古い乗物だと思う——の時代このかた建造されたすべての公共の乗物の中で、まず挙げられるのは乗合馬車オムニバス（ロンドンにお目見えしたのは1829年で、一日四往復、バディントンからバンクまで走っていた。）である。長い道のりもさることながら、車内には六つしか席がなく、おそらく同じ相手と道中ずっと鼻をつき合わせることになるのである——単調で何一つ変化がない。最初の十二時間かそこらが過ぎると、乗客はむっとり顔になり、眠気を催してくる。連れの客がナイトキャップをかぶるのを見てしまうと、敬意もすっかり失せてしまう。少なくとも、われわれの場合はそうである。それに、平坦な道を走っていると乗客はよく辛気臭くなって、長話をやり始める。そして、話をしない者がいても、これがまた実に不愉快な性癖の持ち主とくる。かつて駅馬車の車内席を取って四百マイルの旅をしたとき、客の肥満した男が宿場で馬が取り替えられるたびに、砂糖入り水割りラム酒を窓から入れてもらっていたが、不快なことといったらなかった。また時には、学校を出て上京する少年と乗り合わせたことがあるが、カラーに隠れて首がほとんど見

えない、薄茶色の髪をした青白い顔の男の子で、車掌に身を委ね、引き取り人が来るまでクロス・キーズ（ロンドンのウッド街にある駅馬車の発着所。ディケンズが家族から離れてチャタムから一人で上京したときに着いた場所である。）に留め置かれるという寸法である。狭苦しい車内席では、おそろくこちらの方が、水割りラム酒よりも始末が終い。御者の交替に伴って次つぎと厄介事が発生するし、子供が茶色の紙包みを欲しがっていると車掌が気付いたときには、——われわれがうとうとしかけた途端にきまって気付くのである——何となさけない目に会わされることか。車掌は、その包みをわれわれがうとうとしながら座っている座席の下に置いたことを、はっきり覚えているという。搔き回す、手探りするの大騒ぎ。すっかり目を覚まされ、激しいけいれんを起こすほど神わざに近い力で両脚を上げ続けていると、その脚の後ろからのぞいていた車掌は、荷物を前部の荷物入れに入れたことをふいに思い出すのである。ぱたんと扉が閉まる。包みはすぐに発見される。馬車がまた動き始める。車掌は、われわれのみじめさをあざ笑うかのように、思い切り有鍵ラッパ（六個の鍵がついていて半音階を奏せられる古い楽器。）を吹き鳴らす。

現今では、乗合馬車に乗ってもけっしてこのような苦しみを嘗めることはない。天の下、移り変わらぬものはないのだ。乗客は、万華鏡の像のように、一度の旅の間にも次つぎと移り変わって行く。万華鏡の像のように華麗とはいえないが、それよりずっと面白い。こんな乗物に乗って、はたして一人でも眠りこけた人がいるであろうか？ 例の長話であるが、乗合馬車に乗って長話をしようとする者がはたしているであろうか？ それに、長話をしたところで、それがどうして悪かろう？ 何を話したって、それをじっと聞けるはずもないからである。また、子供であるが、乗合馬車でちょいちょい見受けることはあっても、そうそういるものではない。たとえ子供が乗っていたとしても、いつものように満員であれば、誰かが子供の上に座ってしまうので、その存在に気付くことはないのである。いや、よくよく考え、あれこれと見聞を広めた上ではっきりと言えることは、われわれが幼児洗礼を受けるために乗せられていったガラス窓つきの馬車をはじめとして、いつの日かこの世の最後の旅に赴かなければならないときに乗る黒っぽい幌つき馬車に至



るまで、世に知られたあらゆる乗物の中で、乗合馬車に及ぶものはないということである。

われわれは、道路を走るいかなる馬車よりも、毎日オックスフォード通りの両端からシティまでゆっくりと乗って行く乗合馬車の方を、どうしてもひいき目に見てしまう。はっきりした理由はないのだが、その乗合馬車のやけにけばけばしい外装に比べ、内装が簡素この上ないという理由のためか、それとも車掌持ち前の人を食ったような態度のせいかもしれない。この若い紳士は、献身の徳を身をもって実演する世にもまれな人物で、雇い主につくそうとする気持ちにいささか度が過ぎたところがあって、再さい面倒を起こして、徴治監で時どき面倒を見られる羽目になる。しかし自由の身になるとすぐ、彼は少しもひるむことなく、再びせっせと職務を遂行するのである。この男のいちばんの特徴はその活動力である。彼は大得意で言う、「おれは、老いぼれ紳士をひょいとはつまみ上げて、中に閉じ込め、どこに行くのか奴さんがきょんとしているうちに、走り出しちまうのさ。」——この離れ業をししばやって見せて皆をやんやと喜ばすのであるが、喜ばないのは件の老紳士だけで、彼はなぜかこの冗談が分からないのである。

われわれの乗る乗合馬車が何人の乗客を積み込めるか、正確に確かめられたことがあるかどうかは知らないが、馬車に誘い込まれる人間をいくら収容しても、たっぷり余地はあると車掌の方で感じていることは明らかである。「空いてるかね？」と暑さで身体をはてらせた歩行者が叫ぶ。「がら空きでさ」と車掌は答えて、少しずつ扉を開け、哀れな男が踏み段に足を掛けるまで中の様子は見せない。「どこが？」と罷にかかった人物が訊いて、また後ずさりして降りようとする。「どちら側も空いてますぜ」と車掌は答えて、男を押し込み、扉をびしゃりと閉める。「発車オーライだ、ビル。」もう引込みはつかない。新来の客は何度もよろけて、どこかでころがるとそのまま立てなくなる。

十時少し前にシティに入る馬車ということで、乗客のうち四、五人は常連である。彼らは、いつも同じ場所で拾われ、たいてい同じ座席に座る。彼ら

はいつも同じような服装をしていて、飽きもせず同じ話題を蒸し返す——辻馬車がどんどん増えていきますなどか、乗合馬車の従業員には道義的責任感というものがまるでありませんな、といった具合である。常連の中に、髪粉をつけた小柄で気短かな老人がいて、彼はいつも入り口の扉の右手に、こうもり傘の柄の上に手を組んで座っている。この老人はいたって気が短く、そこに座るのも車掌を厳重に見守るためで、車掌相手にしきりに押し問答を繰り返すのである。彼は乗客の乗り降りに差し出がましく手を貸し、降りたい人がいると、いつもわざわざこうもり傘で車掌を小突いてやるのである。御婦人方には、手間取るといけないから六ペンスを用意しておきなさいといつも勧める。誰かが窓を下ろすと、手が届く限りすぐにまたそれを上げてしまう。

「おい、何で止まるんだ？」と、リージェント街の角で馬車がちょっとでも「止まる」きざしを見せた途端、小男が言う。この際、この男と車掌との間で次のようなやり取りが行なわれる。

「何で止まるんだ？」

ここで車掌は口笛を吹き、その質問が聞こえないふりをする。

「おい（小突いて）、何で止まるんだ？」

「お客さんを待ってるんですよ。パーンク！——タイ！」（いずれも行き先を告げる地名で、パーンクはバンク、タイは）  
（いずれも行き先を告げる地名で、パーンクはバンク、タイは）

「言われんでも分かっとる。だが、止まる必要がどこにある。なぜ止まるとるんだ？」

「いや、いや、難しい質問ですな。まあ、先に進むよりゃ、ここに止まっていたいんでしょうな。」

「いいか」と小柄な老人がすごい見幕で言う、「明日になったら、お前を止めて（原語の‘pull up’のもつ「馬車を止める」と。）治安判事のところへ引きずり出してやるからな。もう何度も言ってきたが、今度はやるぞ。」

「ありがてえことで」と車掌は答え、帽子に手を触れ、ふざけた様子で感謝の意を表明する。——「ほんとにありがてえことでござんす。」これを聞いて、客の若い連中がケラケラと笑う。老人は顔をまっ赤にして、憤まんや

るかたないといった様子である。

馬車の向こう端に、白ネクタイをつけたでっぴりした紳士が座っている。彼は予言者然として、こうした輩は何とかすぐに始末せにゃならん、放っておいたらろくなことにはならん、と言う。すると、緑の鞆をかかえたうらぶれた男が、この意見に対する全面的な同意を表明する。この男は過去六カ月の間、毎朝きまって相手の話に相づちを打ち続けているのである。

このとき、別の乗合馬車が近づいて来て、われわれの馬車のすぐ後ろに止まる。新手の老紳士が、高く杖を振りかざし、われわれの馬車に向かって全力で駆けてくる。われわれは息をこらして、近づく老人を見守る。彼を乗せようと扉が開くが、忽然と老人の姿が消える——商売敵にさらわれたのである。すぐに相手の御者が、「あのご老体は、まんまとかっさらってやったぞ」と言って、こちらの乗員をあざ笑う。そして、不埒な拘禁にむなしく抗議する「ご老体」の声が聞こえる。こちらががたごとと動き出せば、あちらも後を追って動き出す。客を乗せようとこちらが止まるたびに、あちらも止まって同じ客をつかまえようとする。時にはこちらが、時にはあちらがつかまえる。しかし、つかまえられなかった方は、客は当然こっちのものだったと言いき張り、それぞれの馬車の車掌は、その都度お互いをのしるのである。

リンカンズ・イン・フィールズやベッドフォード・ロウ、その他法律家のたまり場近くに到着する。前から乗っていた客はどんどん降りて、新しい客が乗ってくるが、彼らはひどく不機嫌な顔で迎えられる。面白いことに、前から乗っている客は新しく乗り込む者に対して、勝手に乗る権利がどこにあるとばくぜんとながら考えているようで、いつもそんな目で相手を見るのである。例の小柄な紳士がこうした思いを抱いていて、新しく客が乗り込むとそれを一種の消極的無礼とみなしていることは疑いようがなかった。

会話はすっかりとだえて、乗客はみな目の前の窓からぼんやりと外を眺め、誰もが向かいの席の客にじろじろ見られているような気になる。誰かがシュー・レインで降り、また一人がファリンドン通りの角で降りようとする、例の小柄な老人がぶつぶつ口を動かして、あんたもシュー・レインで降りて

いたら、余分に一回止まらなくて済んだのと言う。それを聞いて若い乗客がまた笑い、老人はしかつめらしい顔をして、バンクに着くまで口をつぐんでしまう。バンクで降りると、老人はせかせかとした足取りで歩き去って行き、そのあとわれわれも、老人と同じように先を急ぎ、歩きながら、自分たちの味わった楽しさのいくぶんかでも他の人たちに分けてあげたいと思うのである。

## 第十七章

### 辻馬車の最後の御者、そして乗合馬車の最初の車掌

われわれがかつて面識の榮と喜びに浴した<sup>キャブリオレイ</sup>二輪馬車（木製もしくは皮製のほろ付きの二頭立て二人席の軽装馬車。1830年ごろには略して‘cab’）のすべての御者——この方面での知己はきわめて広範囲にわたるのであるが——の中で、一人けっして拭い去ることのできない印象をわれわれの心に刻みつけ、われわれの胸に賞讃と敬意の念を呼びさましてくれた人物がいる。この気持ちは、いかなる人物によっても今後けっして呼び起こされることはあるまいという不吉な予感がするのである。この御者は実に素朴かつ魅惑的な容貌をした人物で、茶色のおおひげを生やし、白い帽子をかぶって、コートは着用していなかった。鼻はたいてい赤らんでいて、きらきら光る青い目は、見事な造りの黒枠（目の縁のこと）を背景にしばしばくっきり浮き出して見えた。はいているブーツはウェリントン型（既出）で、それをコール天の半ズボンの裾につくまで引っ張り上げ、というか、少なくともできるだけくっつけようと、ブーツを引っ張れるだけ引っ張り上げていた。首にはいつも鮮やかな黄色のハンカチを巻きつけ、夏には花を一輪、冬には麦わらを一本口にくわえていた——これは些細なことかも知れないが、人生を観ずる目には、彼が自然を慈しみ、植物に愛情を注いでいる確固たる証拠と映るのである。

彼の馬車は華やかに——鮮やかな赤色で塗られていた。そしてわれわれが、

シティ、ウェスト・エンド、パディントン、ホロウェイ、北、東、西あるいは南と、どこに出かけても必ずこの赤い辻馬車<sup>（既出）</sup>がいて、街路の角の柱にぶつかったり、貸馬車、台の低い大型馬車<sup>ドレイ</sup>、荷馬車<sup>カート</sup>、大型荷馬車<sup>ワゴ</sup>、乗合馬車の間を縫うように出入りし、他の馬車では絶対入り込めない場所に入ったかと思うと、何やかや不思議な動き方をしてそこから抜け出してしまうのである。この赤色の辻馬車に対してわれわれが抱く愛着心には限りないものがあった。これをアストリー座<sup>（既出）</sup>の曲馬場で見れたらどんなに素晴らしいことであろうか！ 請け合ってもいい、きっと見事な旋回を披露して、並み居る役者たち——インディアン<sup>（既出）</sup>の酋長、騎士、スイスの百姓など一座の花形連の顔色を失わせることであろう。

辻馬車に乗るのはひと苦労だと文句を言う人がいれば、降りるのが厄介だと不平を唱える人もいる。いずれにしても、つむじ曲がりてひねくれた心ゆえに生じる不平であると、われわれには思われるのである。辻馬車に乗り込む手順には、実に美しく優雅な動きがあり、うまくやりこなせば、音楽劇<sup>メロドラマ</sup>（十九世紀初期に流行した音楽を多用する芝居。）に本質的に通じるものがあるのだ。まず、われわれが地面から目を上げた途端に、馬車置場にいる十八人の御者がこぞって表情豊かなパントマイムを始める。それに応じてこちらもパントマイムだ——バレエよろしくといったところ。四台の辻馬車が、われわれのために特別の便宜をはかろうと、ただちに馬車置場を離れる。馬車を引く馬たちがぐるぐると旋回し、車輪を歩道の縁石にぶっつけてきしらせたり、溝でいたずらっぽく戯れる様子は、最高の見ものである。われわれは、これと思う馬車を選ぶと、そちらに向かってさっと突き進む。ひと跳びして昇階段<sup>ステップ</sup>の一段目に乗る。右側にわずかに身体をねじって二段目。手綱の下を優雅に身を屈め、同時に左側に身を寄せていくと馬車の中だ。席を見つける苦労はない。ひざ隠し<sup>エブロン</sup>（既出）がこつんと心地よく身体に当たると、そこが座席で、いざ出発だ。

辻馬車から降りる方は、おそらく理論的により複雑で、実行にあたっても少しばかり骨が折れるであろう。われわれはこの問題を深く追求してきた。その結果、考えられる最善の方法は、身を外に投げ出し、あとは無事に立て

るよう運を天に任せることである。御者を先に降りさせれば、その上に身を投げ出せるわけで、墜落の危険はずっと軽減されるであろう。ハペンスで済まそうと思う場合には、舗道に無事降り立つまで、どんなことがあってもお金を出そうとしたり、それを見せたりしないことである。四ペンス節約しようなどというのは、非常にまずい考え方である（1831年までは1マイル8ペンスが公定の運賃であったが、後に1シリングになったとき、御者の中には差額の4ペンスを当然のチップと見なす者もいたわけである）。客はすっかり御者の掌中にあり、御者は四ペンスの心付け次第で、勝手に客に損害を与えてもいいと考えているからである。しかし、ある程度遠距離まで行く際には、降車方法の知識はまったく不必要である。というのは、おそらく三マイルめを走り終えるまでに、あっさりと馬車から放り出されるのが落ちだからだ。

辻馬車を引く馬が、連続三マイルを一度も倒れないで走り抜いたという話は、まったく耳にしたことがない。倒れるも大いに結構。興奮に胸踊るではないか。神経のたがが緩んで誰もが倦怠感を覚えている今日、人びとは刺激を与えてくれるものには喜んでじゅうぶんな代価を払うのである。これほど安い料金で興奮させてくれるものが他にあるだろうか？

それはさておき、赤色の辻馬車に話を戻そう。これは神出鬼没の馬車であった。ハウバン、フリート街あるいは往来の激しい主だった道路をどれでも歩いてみて、御自分の目で確かめられるとよい。どこかの目抜き通りにやって来ると、すぐにトランクが一つ二つ地面に放り出されているのが目に入る。引っこ抜けた柱、帽子入れ、旅行鞆、それにじゅうたん地の手提げ鞆が、実に華やかに街路にばらまかれている。辻馬車につながれた馬が、そ知らぬ顔で周囲を見回している。野次馬たちは大喜びで盛んに歓声をあげ、ほてった顔を薬屋のガラス窓にあてて冷やしている（こうした薬屋では、奥に外科の治療室があって、交通事故があったりするとけが人をここに運び込んで応急手当）。——「ここで何があったんです？ 聞かせてくれませんか。」——「ただの辻馬車騒ぎですよ。」——「誰かけがでもしたんですか？」——「乗客がやられたんですさあ。馬車が角を曲がって来るのが見えたんで、あっしやそばの人に言ったんですよ、『ありゃ、例の頓痴気野郎ですぜ、えらい勢いでやってきますな』——『まったくです』と相手が合槌を打

った途端、馬車が柱にどかんとぶつかりましてな、乗客が凄い勢いでふっ飛んだってわけさあ。」それが例の赤色の辻馬車であったこと、そして麦わらを一本口にくわえ、薬屋から何くわぬ顔をして現れ、落ち着き払って狭い御者席にのぼり、全速力で駆け去って行ったのが天下公認の御者であったことは言うまでもない。

この赤色の辻馬車の神出鬼没ぶり、そして司法それ自体の笑筋に及ばず影響力ときたら、まことに驚嘆ものであった。市長官邸の法廷に入っていくと、賑やかな笑い声が部屋中に鳴り響いている。市長は自分の言った冗談に狂喜しながら、椅子にふんぞり返っており、ホブラー氏（既出）は市長のおどけた冗談が面白いせいもあるが、それ以上に自分の冗談におかしがって、顔の血管がみな破裂するのではないかと思われるほどの笑いようである。警察署長や警官たちは、市長とホブラー氏の名コンビのおどけに、（義理立てもあって）有頂点になって喜んでいる。教区吏でさえ顔を和らげると、その顔にちらっとうやうやく目をやって、貧民（教区や慈善団体の生活保護を受けていた被救済民。）までもが笑おうとする。どもり癖のある背の高いしなびた男が、赤色の辻馬車の御者に対して詐欺の申し立てをしようとする。それを聞くと赤色の辻馬車の御者、市長、ホブラー氏の三人はおかしくなってこっそりと顔を見合わせて笑ってしまう。それがまたおかしくて、申し立て人の他はみな大喜びという次第。とうとう判事は、赤色の辻馬車の御者持ち前のユーモアにおなかを振らされたあげくに、罰金を減免し、御者は赤色の辻馬車に乗って全速力で走り去り、時を移さずまた別の鴨をひっかけるという寸法である。

赤色の辻馬車の御者は、他の多くの哲人の例に漏れず、自らの道徳心を堅く信じていて、世間の感情や考え方を完全に無視してはばからなかった。概して言えば、彼は客を路上に投げ出すよりは、無事目的地に送り届けた方がよいと考えていたかもしれない——多分にその気持ちはあったであろう。そうすれば運賃が懐に入るだけでなく、さらにどこかのりゅうとした貸馬車を相手に速さを競えるという余分の楽しみが味わえるからである。しかし世間が、処罰という形で彼に挑んでくるからには、彼としても自分なりに世間に

挑戦せざるを得ないわけである。これが、赤色の辻馬車の御者の論法であった。そんなわけで、客が半分ほど走ったところで、お金を取り出そうとチョッキのポケットに手を突っ込むと、彼はその客に鋭い目を向け、ハペンス取り出そうものなら、馬車から降りてしまうのであった。

この友人に最後に会ったのは、ある雨もよいの夕刻、トテナム・コート通りでのことだった。彼は、緑のコートを着た小柄でおしゃべりな紳士と、激しく、そして幾分かは人身攻撃にまで及んでいがみ合っていた。気の毒な男だ！ この御者には大いに弁解の余地はあった。彼は、十八ペンスの料金以上は受け取っておらず、従って腹の虫が納まらないのも当然だった。激しい言い争いが来るところまで来ると、もはやこれまでと多弁で小柄な紳士は頭の中で二人の間の距離をはかり、これ以上払う必要があるものかとばかり、辻馬車の御者に向かって、絶対に「判事に引き渡してやる」と決然と言い放った。

「おい、聞くんだ、若僧」と小柄の紳士が言った、「あしたの朝、出るころに出てもらうからな。」

「とんでもねえ！ 本気かね？」とわれわれの友人がせせら笑って答える。

「本気だとも」と小柄な紳士がやり返す、「よく聞いておけ。言いたいのはそれだけだ。わしがあすの朝まで生きておったら、臍<sup>はぞ</sup>をかむことになるぞ。」

こうきっぱりと言い放ったあと、怒りに震えて嗅ぎたばこを一つかみする小柄の紳士の様子には、断固として目的を貫こうとする意志が感じられ、その言葉には憤然たる響きがこもっていたので、赤色の辻馬車の御者の顔にありありと動揺の色が浮かんできた。彼は一瞬ためらう様子を見せたが、それは一瞬のことで、すぐに気持ちの踏ん切りをつけた。

「おれを引き渡すってんだな？」とわれわれの友人が言った。

「そうとも」と小柄の紳士はますます激しい口吻で答える。

「大いに結構」とわれわれの友人は、平然とシャツの袖をまくし上げながら言った。「三週間は食らうことになるな。悪い話じゃねえ。来月の半ばま



で食らい込むってわけだ。それに四週間を加えりゃ、おれの誕生日がきて十ポンド引き出せるんだ。それまで、賄いも宿も洗濯も、おれに代ってお上に面倒を見てもらおうじゃねえか。だからよ、これでもくらえ！」

いきなり、赤色の辻馬車の御者は、小柄な紳士を殴り倒した。そうしておいて、彼は自分で警察を呼び、淑女のように慎ましい態度で拘引されて行った。

話というものは、結末抜きでは興ざめである。それゆえその後の経緯を話しておくことにする。確かに、食事、宿、洗濯の必要はどれも順当に満たされた。事実というものは偶然に知れるもので、われわれがこれを知ったのも、次のような偶然の事情があったからだ——上記の出来事があってから間もなく、われわれは<sup>かんこう</sup>箝口制度がどのように実施されているかこの目で確かめるために、ミドルセックス州（イギリス南東部、ロンドンの西部及び北部に接する州。）の懲治監（クラーク・インウェルのコールドバース・フィールズにあったもので、現在は小包郵便局の敷地になっている。沈黙が厳しく課せられていた。1877年に閉鎖された。）を訪ねた。われわれは、長らく行方不明になっている友人を捜し求め、心配で気を揉みながらそこにあるすべての踏み車（当時、監獄の中で、懲罰のため、囚人に踏ませていたもの。）に目をやった。しかし彼の姿はどこにも見られず、緑のコートを着たあの小柄な紳士が気持ちを和らげて許してやったに違いないと思い始めたとき、われわれは人声を聞いてびっくりした。その時は、獄舎のはずれにある菜園を横切っていたのであるが、その声は明らかに獄舎の中から聞こえてきたもので、熱っぽい調子で、「わたしの帽子いっばいに」（「帽子いっばいに青柳の枝をつけましょう」という俗謡がもとになっていると思われる。帽子に柳の枝をつけるのは、失恋や愛の哀しみ）というものの悲しい歌を歌っていた。それは、大衆歌謡として、ちょうどその時期広く口ずさまれ始めていたものだった。

われわれは、ぎくっとした。——「あの声は何ですか？」とわれわれは訊いた。

監長は、首を横に振った。

「けしからん男です」と彼は言った、「まったく始末に負えぬ奴です。奴はどうしても踏み車を踏もうとせんのです。それで何度か試みたあげくに、仕方なく独房入りを命じたってわけですが、奴はそこが大いに気に入ったと

はざくんです。まんざら嘘でもないようで、床に寝そべって一日中ざれ歌を歌っとなります。」

言い添える必要もあるまいが、われわれの思った通りで、ざれ歌を歌っている男は紛れもなくわれわれが切に捜し求めている友人、あの赤色の辻馬車の御者だったのである。

それ以来彼に会ったことはないが、この天晴な人物が、われわれの知人である水飼人<sup>(既出)</sup>の遠い親戚であるという有力な根拠を、われわれは掴んでいる。ある時、この知人が我物顔でのさばっている貸馬車営業所をわれわれが通りかかると、彼は背の高い男が辻馬車に四苦八苦しながらのぼるのをじっと見ていた。彼は、客がすっかり乗り込んだところで、さっと走り寄ると（こうした輩がきまってやる手である）、帽子に手を触れ、さも当然といった具合に「小銭でもいただきやしょう」と催促した。ところが、乗客というのがけち臭い男で、その催促にいきり立って答える——「金をくれだど！何で出さなきゃならんのだ？ 用もないのにやって来てわしが乗るのを見てたからって言うのか！——」と、「さよう」と、彼は愛想笑いを浮かべたまま、びくともしないで答える、「それで二ペンスになるんでさあ。」

他でもないこの水飼人が、後に社会的にきわめて高い地位に就いたのであった。われわれは彼の生活について多少は知っているし、知っていることは人に話したいといつも思っているの、この機会にそれを話しておくのがいちばん良いだろう。

さて、ウィリアム・バーカー氏——それがこの紳士の名前であった——ウィリアム・バーカー氏が生まれたのは——いや、ウィリアム・バーカー氏がどこで生まれたとか、いつ生まれたとか話しても始まらない。教区の登記簿に書き込まれた記録を事細かに調べたり、産院におけるルーキーナ<sup>(ローマ神を司る女神。話で出産)</sup>の神秘に迫ったところで何になろう。ウィリアム・バーカー氏は生まれたのである。さもないければけっして存在しなかったはずである。息子がいる——それは父親がいたからである。結果がある——それは原因があったからである。これだけ言えば、きっとファティマ<sup>(民間伝説の「青ひげ」の七番目の妻。夫が六人の妻を殺して秘密の部屋に</sup>

隠していたのを青い部屋で発見し、自らは死を免れた。「女性のせんさく癖」と同義に用いられる。）のようないかに好奇心旺盛な人にも納得してもらえらるだろう。納得できないと言われても、残念ながらこのことについては、これ以上明白な言い方はできない。これほど満足の行く進め方、言い換えれば、これほど完璧な議会的手続き（議会の手続きのように慎重でゆっくりにしていることをいう。）があるだろうか？あるはずはない。

まず卒直に認めなければならないが、この紳士の父祖伝来のウィリアム・バーカーという名前が、いついかなる時に、またいかなる経緯で「ビル・バーカー」に訛ってしまったのか、この点についてもわれわれはこれ以上ははっきりした事実を書き記すことができない。バーカー氏は水飼いの仕事に何よりも精力を傾けて励み、仕事仲間の間で高い地位となかなかの評判を勝ち得ていた。そして同業者には、ふつう「ビル・ボーカー」という親しみのある呼び名か、また「じらしのビル」というありがたい呼称で知られていたが、この「じらしのビル」という呼び名は、ふざけてはいるが意味深長な「綽名<sup>ニックネーム</sup>」で、乗合馬車によってあちらこちらに運ばれて行く女王陛下の臣民を、「じらす」とか怒らせるバーカー氏の偉大な才能を示すものであった。バーカー氏の若い頃の生活についてはほとんど何も知られていないし、知られているものでも、かなり疑わしく、あいまいである。勤勉さの欠如、右顧左眄する心、黒ビールへの渴望、世を渡り歩く生まれながらの浮浪人のような生き方すべてに寄せる愛着といったものが、数々の素晴らしい他の天性と相俟って、彼の主要な特徴であったように思われる。教区の貧民学校のがやがやした騒音も州の刑務所での木蔭の憩いも、バーカー氏の性格にいささかでも変化を与えるということにはなかった。変化変転を求める彼の熱情を抑制できるものはなかったし、いかなる刑罰をもってしても彼持ち前の大胆不敵な勇気を挫くことはできなかった。

若い頃のバーカー氏には何らかの弱点があったと言われるのも仕方ないことであるが、それは男として無理からぬもの——愛であった。つまり、婦人、液体、ハンカチへの愛着心（偽証罪、飲酒癖、窃盗）であった。それは、けっして利己的な感情ではなかった。遺憾なことに、多くの人とはひとりよがりの満足

感を抱いて自分の所有物を眺めるのであるが、彼の愛は自分の所有物だけに限定されるものではなかった。そんなけちなものではなかった。もっと高尚な愛——愛全主義であり、我が物に劣らず他人の財産へと愛の翼を広げていったのである。

こうした彼の性格には、実に哀れを誘うものがある。これほどの博愛がろくに報われないとなれば、さらに痛ましい気持ちにさせられる。ボウ街（<sup>ロンドン</sup>のロヴェント・ガーデンにある街名。）、ニューゲイト（ロンドンの旧市街シティの西門にあった中央警察裁判所がある。）、ミルバンク（<sup>ロンドン</sup>のグロウヴナー通りにあった懲治監で、1890年に壊された。現在はテイト・ギャラリーになっている。）、が、創造物すべてに対する止みがたい愛となって示される彼の博愛へのささやかな報いであった。それはまた、バーカー氏の思いでもあった。法の最高権威者との長時間にわたる会見を済ませると（<sup>裁判で有罪を言い渡されたこと。</sup>）、彼は政府の承諾と費用で、恩知らずの祖国をあとにし、遥けき土地へと赴いた（<sup>オーストラリアに流されたこと。</sup>）。そこで彼はキンキナトウス（ローマが危急に陥ったとき、田園生活から呼び出され60才で執政官となり、平和をもたらすとまた田園に帰ったという半伝説上の人物。）よろしく、土地を切り開き開墾する仕事に従事した——のどかに農事を続けているうちに、七年の任期はいつの間にか事もなく過ぎ去っていった。

上述の七年の任期が終わったとき、イギリス政府がバーカー氏に帰国の命を下したのか、それとも外国に居住するに及ばずとの沙汰を出したのか、われわれはそれをはっきりと確認する手段を持たない。ただわれわれとしては、あとの方<sup>ポスト</sup>の見解を支持したい気持ちである。帰国したときに、彼が与えられた仕事はヘイマーケット（<sup>ロンドンのウェスト・エンドにある繁華街。</sup>）の角にある柱<sup>ポスト</sup>だけだったからである。そこで彼は、貸馬車営業所の水飼係助手としての職務に勤しんでいた。この地位に就いた彼は、真鍮の許可番号つきの鑑札を太い鎖で首に吊し、踵を乾し草の紐で妙な具合に包み、舗道の縁石近くに置いてある二つの樽に腰掛けて、さまざまな人間模様を観察し、その後の人生行路に多大の影響力を及ぼすことになった、人間性への知識を養っていたと思われるのである。

バーカー氏がこの役職を務めて何か月も経たぬうちに、最初の乗合馬車が出現して、民心を新たな方向へ向けさせ、多数の貸馬車をどこにも向けさせ

ないようにしてしまった。才人バーカー氏は、乗合馬車が新たに加わることでもたらされる運行制度の発展によって、やがて辻馬車や貸馬車の営業所、ひいては水飼人がどれほど多大の打撃をこうむることになるかを、目ざとく察知した。彼はまた、もっと金になる仕事を選ぶ必要があると考えた。回転の早い彼の頭に、すぐに金儲けの算段が浮かんできた——行き先の違う馬車に、若くてうかつな連中をうまく騙して誘い込むとか、老いぼれて何もできない連中をいやおう無しに押し込むかして、遠くまで乗せて行き、その客たちがもうだめだと諦めて、一人頭六ペンスの身代金を払って我が身を釈放してもらう気にさせるか、あるいは、美しい訛り言葉を駆使した彼自身の華麗な表現を借りて言えば、「連中がすっかりへこたれちまって、ぜにを出す」ようにしてやれば、金はどんどん入ってくる、という寸法である。

まことに虫がいい彼の見込みを実現させる機会が、ほどなく訪れた。貸馬車営業所では、オックスフォード通りとハウバン経由でリソン・グロヴウからバンクまで走る乗合馬車が建造されているとのうわさで持ち切りだった。パディントン通りを走る乗合馬車がにわかに増えてきたことも、そのうわさに油を注いだ。バーカー氏は密かに、そして用心深く然るべき筋に打診してみた。うわさは本当だった。「ロイヤル・ウィリアム」号が、翌週の月曜日に処女運行する予定になっていた。これはまったくぶっつけ仕事であった。この乗合馬車を御する男は、血の気の多い馬車野郎——彼は自分の馬車で押し潰した三人の子供の両親と示談を済ませたあと、老婦人を殴り倒して課せられた罰金を、「踏み車を踏んで返した」(罰金を払わず、刑務所に)ばかりだった——として勇名をとどろかせていた進取の気象に富む辻馬車の御者であった。そしてこの勇ましい事業主は、バーカー氏の適性を先刻承知していたので、彼が申し込むと二つ返事で空いている車掌役に彼を登用したのであった。馬車が走り始めた。そしてバーカー氏は新しい衣服に身を包み、新しい活動分野へと身を乗り出していった。

この非凡な男が、乗合馬車の運行方式に——たしかに徐々にではあったが、確実に——もたらしたすべての改善をかいつまんで話そうとすれば、この不

完全な記録に割り当てられたスペースではとても間に合わないだろう。後に広く行き渡るようになった慣行を最初に考え出したのがこの人物であることは、あまねく人の認めるところである——つまり、前を走る馬車の後ろに自分の馬車をずっとくっつけて走らせ、前の馬車が客を拾うために扉を開けるたびに、自分の馬車のながえをそこに突っ込むとか、前の馬車に乗り込もうとする者には、紳士であろうと淑女であろうとおかまいなく、その身体にながえをおっつけるわけである。これはユーモアに富む愉快な趣向で、この偉大な人物のすべての行動に顕著に見られる独創性と、鋭敏で恐れを知らぬ澁刺とした精神を余すことなく示すものであった。

バーカー氏には、もちろん敵がいた。公の生活で、敵のいない人がいるだろうか？ しかし、同業者が六人束になってもかなわないほど多くの老婦人と老紳士を、パディントンからバンクに、そしてバンクからパディントンに、それぞれ行きたい方角とは逆の方に彼が運んだことは、彼のいちばんの敵でも否定できないのである。そして悪意を抱く人たちが、そんな話など信じられるものかといった顔はしてみせても、この男が、どこかに行く意志などまったくないとっていい男女さまざまの老齡者を、無理矢理バンクとパディントンに運んでいるのが既定の事実であることを、彼らはじゅうぶん承知しているのである。

その後しばらくして、立派に名をあげた乗合馬車の車掌がいたが、それが他ならぬバーカー氏であった。彼は、ある小売商人をずっと昇降段<sup>ステップ</sup>に立たせたまま——馬車はその間全速で走っていた——腹の虫がおさまるまでこの商人を打ちすえ、とことん痛めつけたあげくに馬車から放り出したのである。バーカー氏——当然彼以外には考えられない——は、公共の娯楽場<sup>(居酒屋のこと。)</sup>から不名誉にもつまみ出されたことに心底腹を立て、亭主のひざを蹴り、それがもとで彼を死なせてしまった。われわれに言わせればこれは当然バーカー氏の仕業であった。やることが尋常でなく、凡人の為す能わざることだったからである。

これは現在では歴史的イベントとなっており、ニューゲイト・カレンダー<sup>(1700年か)</sup>

ら19世紀初めまでのニューゲイト監獄の重罪犯人の経歴を記録したもので、「重罪犯人の残虐な記録」という副題がつけられている。1774年に最初の5巻が出版され、1824年から26年にかけて、さらに4巻が出版された。)に記録されている。われわれは、その大胆な英雄的行為を遺した

記録が、パーカー氏その人のものであると考えたいのであるが、残念なことに、彼が為したものはどうしても言えないのである。一族の名誉のために、それが彼の弟が成し遂げたものであると言い添えることができれば、われわれも本望なのだが。

車掌という人情の機微に触れる職務を遂行することにおいて、パーカー氏の人間性に対する蘊蓄は見事に証明されたのである。彼は一目で、客がどこに行きたがっているかを見て取ると、馬車の実際の行き先などまったく無視して、適宜これと思う地名を叫ぶのであった。彼は、ほろ付き馬車に押し込まれたり引っ張り出されたりして慌てふためき、自分がどこかで降ろされてやっと間違いに気づくようなことをする老婦人が、どんなタイプであるかをちゃんと知っていたし、「あの車掌のやつめ、あしたの朝、治安判事に引き渡してやる」とひそかに意を固める乗客がいれば、その客の心の動きを本能的に察知した。そして、女中にはきまって愛想よくし、よく扉の横の席に座らせて、しきりに話しかけるのであった。

人間の判断は、絶対に正しいということはない。パーカー氏が勘違いして、見当違いの人物の気弱さや辛抱強さを実地にためすようなこともちょくちょく起こったわけで、そうすると彼は警察署に呼び出され、一度ならず投獄される羽目になった。しかし彼の自由な精神が、こんな些細なことで挫かれるはずはなく、こうした小事の方がつくとすぐ彼は、何事もなかったように再び職務に精を出すのであった。

パーカー氏と赤色の辻馬車の御者のことを、これまで過去形で話してきた。ああ、パーカー氏もまた行方知れずの人になってしまった。二人がともに属していた階層の人たちは、急速に姿を消しつつある。辻馬車のひざ隠しの下にも改良の手が伸び、乗合馬車の隅々まで改善が施されるようになった。汚れたあや織綿布の服は、清潔な仕着せを前にして消えて行くであろう。誰もが上品な言葉を使うようになって、下町言葉は忘れられてしまうだろう。

そして雄弁で、心の開けた、賢明かつ該博なロンドンの判事団は、その楽しみ  
の半分を、そして仕事の半分を奪われることになるのだ。

## 第十八章

### 議 会 点 描

読者諸氏には、この少々不吉な題名を見ても、驚かないでいただきたい。安心してもらっていいが、われわれはここで政治を講じるつもりはないし、いつも以上に無粋な話をしようなどとは、少しも考えてはいないからだ——でき得ればの話である。「議事堂」\* の概観と、重要な討議が行なわれる夜に、そこによく押しかける大衆の様子をあらまし描写すれば、興味深いものが何か引き出せるのではないかという思いもあったし、若い頃足繁く前述の建物を訪れたことがあるので——個人的な平安と慰安には度が過ぎたきらいはあったが、今度の目的を叶えるには困らぬほどしげしげ訪ねたものである——この素描を思い立った次第なのである。それゆえ、国会議員の特権侵害、守衛官、身にこたえる叱責、懐にはもっとこたえる包み金といった漠とした印象が自ずと呼び起こす畏怖の念はいっさい捨てて、すぐに建物に、そして話に入ることにしよう。

四時半である——そして五時に勅語奉答文（国会の開会での国王の）の答辞人が「立ち上がる」予定である。答辞人が、時には逆立ちする癖でもあるかのよう  
に、新聞はときおり奇をてらってこんな表現を使うのである（原語の 'be on his legs' は、「立っている」という意味が普通であるが、国会議員などに用いられると「演説する」というおどけた表現にもなる。ここでは「答辞を読む」とか言えばいいのに、わざわざ気取った表現を使っていることを皮）。議員たちが、次つぎと群れをなして議場に流れ込んでくる。廊

\* ウェストミンスター宮殿とも呼ばれる国会議事堂は、16世紀にヘンリー八世がホワイトホール宮殿に移るまで、国王の居城であった。1834年の大火で灰じんに帰したあと、1837年まで焼け残った部分を応急改造した仮の建物で、両院の議会が召集されていたが、この時期の議事堂の様子が、この素描の題材の一つになっている。



下の空いた場所に陣取ることのできる幾人かの見物人が、そばを通る議員を実に興味深そうにじろじろ見つめる。そして、時おり議員の名前が分かる人がいると、その人まで重要人物と見なされる。ときどき、熱心なささやき声が聞こえてくる——「あれが、ジョン・トムソン卿ですよ。」「誰？ 首に金色の鎖をかけた人ですか？」「いや、いや、あれは送達吏です——黄色の手袋をはめたあの人、あれがジョン・トムソン卿です。」「スミス氏ですよ。」「これは、これは、／」「そうなんです。今晚は」——（スミス氏は新人議員である）——「今晚は」。スミス氏は立ち止まって、うっとりさせるほどの優雅な物腰で振り返る（今朝、解散が予定されているとのうわさが、いたるところでささやかれていたからである）。彼は、にこにこ顔で自分を迎えてくれる選挙区の住民の両手を取り、心のこもった熱烈な挨拶を済ませると、公衆の福利に身を捧げんとする熱意を全身にみなぎらせ、まっしぐらに控え室へと突き進む。そして、それを見送る「同郷人」の心に、限りない感銘を抱かせるのである。

到着する議員の数が増え、熱気と騒音の不快指数が高まる。制服を着た守衛が廊下の両側に完全な人垣をつくり、見物人ははみ出さないように、足でやっと立てるだけの間隙に身を置いて、動きが取れなくなってしまう。しゃがれ声の、でっぷりした人物が目に残る。青色のコート、つばが広くて山の部分が妙に歪んだ帽子、白いコール天の半ズボン、それに大きなブーツとといったでたちで、かれこれ三十分もの間、のべつしゃべり立てており、そのもったいをつけた態度を見て、見物人の間に笑いの輪が広がる。この人物は、ウェストミンスター宮殿（国会議事堂のこと。）の偉大なる治安維持官なのである。今、通りかかったばかりの議員に敬礼する優雅な物腰、あるいは見物人たちを諷刺するときのいやにもったいぶった態度には、いやでも目を奪われるものがある。彼は、今、自分の後ろではじめから笑ってばかりいる二人の若者の非常に礼を失った態度に、少々機嫌を損ねている。

「今晚、採決はあるでしょうか、どうでしょう？ お名前は、ええと——」と、見物人の中から一人の小柄で痩せた男がおずおずと尋ねて、この官吏の

機嫌を宥めようとする。

「よくもそんな質問ができるもんですな」と、彼はびっくりするほど声高に答へ、右手に持っている太い杖を怒って握り締める。「どうかそんなことは訊かんで下さい。お願いします。訊かんで下さい。」小柄の男は立つ瀬を失って、困り果てた様子である。新参の見物人はこれを見て、腹の皮をよじって笑い興じる。

ちょうどこのとき、誰やら運の悪い人物が、にやにやと作り笑いを浮かべながら長い廊下の端に現れる。彼は、階下の特任巡査の警戒をうまくくぐり抜けて、そこまで辿り着けたことを明らかに喜んでいる様子だった。

「もどって下さい——ここに入ってはなりません」と、この不屈き者と目が会った途端、例のしゃがれ声の官吏がすごい声で見幕で叫ぶ。

侵入者は足を止める。

「聞こえんですか——もどって下さい」と高官は繰り返し言っ、この侵入者を六ヤードばかり静かに押しもどす。

「おい、押すんじゃない」と、男はむっとした顔で振り向いて言う。

「押しますよ。」

「やめてくれ。」

「出て行って下さい。」

「手を放してくれ。」

「廊下から出て下さい。」

「横柄な役人だな。」

「何ですって？」とブーツをはいた官吏が叫ぶ。

「横柄な役人だってことです。実に無礼なやつだ」と、今や完全に頭にきた男が繰り返す。

「どうか力尽くで押し出すようなことはさせんで下さい」と官吏がやり返す——「お願いします——廊下に人を入れぬよう命令されとるんです——議長命令ですぞ。」

「議長なんか、くそ——」と侵入者が叫ぶ。

「おい、ウィルソン／＼——コリンズ／＼」と、官吏はこの無礼な言葉にまったく啞然として、喘ぎながら言う。これはまさに大逆罪ではないか。「この男を連れ出せ——連れ出すんだ、けしからん／＼ よくもまあ君は——」不運な男は、一度に五段ほど階段を降りて、止まるたびに向き直ってまたもどろろとし、総指令官(官吏の)(とと。)その他大勢に対して、この恨みはとことん晴らしてやると高言する。

「道をあけて下さい、みなさん——議員が通れるよう道をあけて下さい、お願いします」と、この熱心な官吏は引き返しながらかいび、自由党議員をずらりと後に従えて進んで来る。

どう猛な顔つきをした紳士が目にとまる。シャツの色とほとんど変わらない黄ばんださえない顔色をしていて、その黒い大きな口ひげは、床屋の飾り窓に置かれたモデル人形さながらといった感じである。ただ彼の表情に、崇高な人間の顔を戯画化した、あのろう製のモデル人形の瞑想的な表情と通じるものがあればの話である。彼は国民軍将校で、議場でもっとも面白い人物である。彼が、安っぽいオランダ時計に取り付けられたトルコ人の顔よろしく、目をぎょろぎょろさせながら控え室(こゑむろ)の方に大股で歩いて行くとき、その道化じみた威厳たっぷりの物腰には、珍無類のおかしさがある。彼が姿を現すときには、きまって左の小脇に汚れた書類の束を抱えているのであるが、それは1804年度の歳出歳入予算の雑書類か、それと同様に重要な書類であろうというのが大方の見方である。彼はいつも決まった時間に議場にやって来て、ひとり悦に入って「きーん聴——きーん聴」と言うとき、たいていそれをきかけに、皆がくすくすと笑い出すのである。

かつて、旧下院の傍聴席から鼻眼鏡をかけて、自分に嘲笑的な目を向けている人物の名を問いたすために、実際にそこまで使者を差し向け、当の人物を議長に告訴したというのが、この紳士なのである。またある時、彼がベラミーズ・キッチン(ベラミーというのは、もとの下院の建物に隣接していた簡易料理店の名で、料理が素晴らしく、また議会の採決のベルが聞こえる近さにあったため、議員のたまり場になっていた。)——議員でなくても、いわば目こぼししてもらって利用を許されていた食堂——にのり込んだときの話が伝わっている。二、三人の紳

士が食事を取っていたが、彼らが議員でないことが分かり、場所柄相手もあまり怒るわけにはいくまいというわけで、料理ののった食卓の上にブーツをはいた片足をのせて座り、悦に入っていたということである。とは言っても、彼は大体にして悪気はない男だし、常に人を楽しませてくれるのである。

辛抱して待った甲斐があって、また友人の特任巡査にちょっとばかり顔も利いたので、われわれは何とか控え室のところまで辿り着いた。議員を中に入れるために扉が開けられるときに、ちらりとではあるがどうにか議院内の様子を窺うことができる。控え室には、すでにいっぱいになるほど議員が詰めかけていて、その日の興味深い話題を論じ合っている。

ビロードの縁取りと袖口のついた黒いコートを着用し、ドーセイ伯風の帽子（ドーセイ伯（既出）は、ひときわ山が、高くつばの広い帽子を愛用していた。）をえらく粋にかぶっているりゅうとした人物は、ロンドン区選出の「正直トム」である。そして、白い裏地の外套を着た大柄な人物——柱のそばにいる人ではなく、薄茶色の髪をコートの襟の後ろまで垂らしている人——は、トムの党友である。青色のサートゥ外套、灰色のズボン、白いネッカチーフそして手袋を装い、ボタンのぎっしりついた上衣によって、男らしい容姿と広い胸が見事に引き立って見える、穏やかでいかにも紳士的な風貌の人物は、世に広く知られた名士である。若かりし頃、彼は歴戦の雄としてその名を鳴らし、いにしえの英雄のように、神々が彼に与えた武器（原語の‘arms’の「腕」とい）だけを頼りに敵を征服してきたのである。彼のそばに立っているこわい顔をした老齢の人物は、今や絶滅しかけた種族の全き見本である。彼は州選出の議員で、記憶を辿っても、議員以外の彼の姿は思い浮かばない。服装に注目していただきたい。巾が広くだぶだぶしていて、大きなポケットが両側についている茶色のコート、半ズボンにブーツ、ばかに長いチョッキ、その下にぶら下がっている銀の時計鎖、つばの広い茶色の帽子、大きな蝶結びにしてそのほぐれた先がシャツの飾りべりの上につき出ている白いネッカチーフ——これは今日ではほとんど見受けられない服装である。そして、こうした装いをする数少ない人たちも、次つぎとこの世から去って行き、やがてすっかり姿を消してしまうことだろう。彼は、フォック

ス(C. J. フォックス, 1749—1806. 18世), ピット(ウィリアム・ピット, 1759—1806. 通称「紀の貴族的自由主義者の最後の人。」), ピット(小ピット. 1783年24才で首相になった。), シェリダン(R. B. シェリダン, 1751—1816. ダブリン生まれで、下院議員であると同時に、『悪口学校』などの劇作家としても有名。)それにカニング(ジョージ・カニング, 1770—1827. ピット内閣の閣僚として敏腕をふるい、後首相になる。)のことや、その当時の方が議会ははずとうまく運営されていて、全議員にあらかじめ通知される定例の重要案件討議日以外には、八時か九時に起きたものだ、といった話を長々と人に話して聞かせることができるのである。彼は、若手の国会議員に対して強い軽蔑感を抱いていて、少なくとも十五年間は出しゃばった口をきかないで議員を務めなければ、傾聴に値する発言など絶対にできるはずがない、と考えている。彼は、「あの若造のマコーレー(T. B. マコーレー, 1800—59. 1830年ホイッグ党の下院議員となり、イギリスのインドに関する法律の成立に、重要な役割)はしょうもない売国奴だったと考えており、スタンレー卿(1799—1869. 1832年の選挙法改正案を熱心に擁護した。後、三度にわたって首相を務める。)」がやがては何かをやる人物であることは認めても、「あれはまだ若い——若すぎますよ」と言うのである。先例の話になると彼はすぬけた権威であり、ワインを飲んで口がなめらかになると、どこそこの何がし卿が院内幹事をしていたとき、与党に投票させるために四人の男を病床から連れ出したが、そのうち三人は再び家に帰る途中死んでしまったとか、議会在一度、新しくろうそくを持ち込むかどうかという問題で賛否の採決を行ったとか、議長があるとき、議事日程が済んだあと、ふとした手違いで散会の宣言をしないまま議長席に取り残され、三時間一人で議事を進める羽目になったが、ある議員を叩き起こして議場に連れもどし、やっと散会の動議を出すことができたとか、他にもこれと同じような多くの逸話を話して聞かせるのである。

今彼は杖にすがって、周囲に集まっているしゃれた服装の議員たちを、軽蔑しきった顔で眺め、過ぎ去りし日の昔の議事堂で目撃したさまざまな光景を、ありありと眼前に呼び起こすのである。その頃は、自らの感性ももっとみずみずしく鋭敏であったし、機智、才能、愛国心もまた現在よりも光彩を放っていたように思えるのだ。

ごわごわした大外套を着た若者がいて、誰なんだろうと好奇心をそえられる。彼は、われわれがここに来てからずっと議場の控え室に入って来るすべ

ての議員に近寄って言葉をかけている。彼は議員ではない。ただの「世襲の奴隷」(G. G. バイロンの「チャイルド・ハロルド」)、換言すればアイルランドの新聞のアイルランド人の通信員にすぎない。たった今彼は、一面識もない議員から、四十二通めの無料送達の署名(1ペニーの郵便制度が実施されるようになった1840年まで、国会議員や特別の公務員は封筒に署名して、無料で郵便物を送達できる特権を持っていたが、これがしばしば悪用された。)をもらったところである。ほらまたやっている——また一つ！ いやはや、帽子とポケットはもう封筒でいっぱいではないか。

傍聴席に入れるかどうか、ひとつ運だめしをしてみよう。ただ、討議の内容からいって、うまくいく見込みはまずないと覚悟しておく必要がある。何をしてるのです、許可証を振り上げたりして？ それが、開けごまのまじないになるとでも？ よしなさい、ばかばかしい！ 保存するだけの値打ちがあるのなら、その許可証は渡さないで複写のために取っておくことだ。そして、親指と人差し指を意味ありげにチョッキのポケットに突っ込んで、入口に姿を見せるだけで事は済む。そこにいる黒い服を着た、背の高いでっぴりとした人物が守衛である。「空いてますか？」「議だって入れませんな——誰かが出て行くのを狙って、下でまだ三、四十人ほど待ち構えとるんです。」ここで財布を取り出して——「ほんとうに空いてないんですか？」——「見てください」と守衛は、財布にちらっと物欲しそうな目を向けて答える、「ですが、当てはありませんぜ。」もどって来ると彼は真顔で、傍聴席の近くに行くのも実際無理です、と念を押す。待っていても埒はあかない。こうした事情で傍聴席に入れなかったときには、ほんとうに満員すしづめは間違いなしと、得心して帰れるわけである\*。

われわれはもと来たところをもどって、長い廊下を抜け、階段を下りてパレス・ヤードを横切り、上院の国王登院門に接続する小さな仮設の出入口のところで足を止める。守衛官の許可を受けて記者席に入れば、そこからかな

---

\* (原注) 半クラウンというわずかな料金で、国会議員を何か珍奇な見せ物と同じように公開して見せる慣行があったが、この素描はそれが廃止される前に書かれたものである。

りよく議場を眺めることができる。階段に注意しないと、これがまたひどいのである。目の前の小さな出入口を抜ける——そこが記者席だ。その場のかすんだ空気と眼下のシャンデリアのまぶしさに少し目が慣れるとすぐ、与党側の席（向かって右側である）のあまり偉そうにない議員が演説しているのが目に入る。彼は、すべてがひとつの国の言葉であるという事情を除けば、バベルの塔にも張り合えそうながやがやした話し声と騒音の中で発言しているのである。

「謹聴、謹聴」という例の哄笑を引き起こした声が、口ひげを生やした勇ましいわれわれの友人の口から発せられる。彼は、今発言している議員の背後の、奥の壁際の席に座って、相変わらずどう猛で<sup>・</sup><sup>・</sup><sup>・</sup>理知的な顔つきをしている。議場を一度ぐりと見回して、すぐに退却することだ。議場の中央も両翼も議員でいっぱいである。向かいの席の背に足をのせている者もいれば、床に長々と足を伸ばしている者もいる。誰かが出て行けば、誰かが入って来る。誰もがしゃべり、笑い、ぶらつき、咳払いし、ああと嘆声を発し、質問し、またうなり声をあげたりしている。こうした騒音と混乱がいっしょくたになって生じるやかましきは、世のいかなる場所の騒音をも凌ぐものである。市日のスミスフィールド（シティの一地区で、以前は家畜や馬を扱っていた市場であったが、1855年にカレドニアン通りに移った後、1868年になってその跡地に中央肉市場が）や、全盛時の<sup>コックベット</sup>闘鶏場（17世紀末、ロンドンのウェストミンスター）の騒音でもこれには勝てない。

しかし、バラミーズ・キッチン、つまり食堂のことを忘れてはなるまい。これは上院、下院の区別なく、与党議員や野党議員、ホウィッグ党员やトーリー党员、急進党员、貴族、そして破壊主義者に加えて、傍聴席からやって来る一般の人、さらに下の酒場で飲んでいた人たちまでもが大目に見てもらって、みな自由に使っている食堂なのである。ここに下院議員が二、三人ほどやって来て、重大な討議の最中でも腰を上げようとはせず、自らの精神が完全に自由であることを証明し、かつまた飲食物によって肉体に慰安を与えている。そして採決が迫ったとき、院内幹事に呼ばれてやっとみこしを上げるのであるが、それは、彼らが、良心に鑑みてまったく知る由もない提議に

対して、良心的に採決の票を投じるためか、もしくは、ワインの煽り立てるあふれるばかりの愉快的想念を、「採決！」という賑やかな声をあげて発散するためなのである。この叫び声は多様に変化し、時どきちょっとしたなり声、吠え声、鳴き声になったり、また上院議員が急におどけた声を出してみせたりする。

現在は仮設中である下院内の狭い階段を上ると、今紹介している場所に出るようになっていて、右手におそらく、料理の並べられた二つの部屋が見られるだろう。どちらの部屋も例のキッチンではないが、両方とも同じ目的に当てられている。キッチンは左手のもっと先の方で、階段を五、六段上がったところにある。しかし、階段を上る前に、上げ下げ窓のついたこの小さな下院の酒場の前に立ち止まって、この場所を一手におさめている、黒い服を着たまじめで正直そうな老齢の人物に、特に目をとめてもらいたい。ニコラス（この老人の名前をあえて言わせてもらおう。ニコラスこそ公人と呼べる人物なのである——そして公人の名前は公の財産なのだ）——ニコラスは、ベラミーの執事であり、現在の顧客の中でもっとも年長の人の記憶を辿ってみても、彼は常に同じ場所に陣取り、まったく同じ服装をして、おうむのように同じ言葉を繰り返している。ニコラスは優秀な召使である——サラダ用ソースの混合にかけては、彼に叶うものはいない——レモンソーダづくりの名人——グログを混ぜた冷たいポンチ酒をつくらせたらぴかーである。——そして、なかんずく、チーズの識別では第一人者である。この老人が自分の混合するものにうぬべらしきものを抱いているとすれば、チーズの方は間違いなく彼の誇りである。そして、彼の計り知れない冷静さを乱すものがこの世で何か考えられるとしたら、それは、この重要な問題における自らの識別力に狂いが生じた場合であろう。

しかし、こんなことをくどくど説明する必要はない。というのは、わずかな観察力さえあれば、彼のすべすべとした頭髮や如才のない顔つき——不恰好なネクタイを過去二十年間おきまりのように包んでいて、シャツの襟の小さなひだべりの中にほとんど見分けのつかない形で没している、きちんとし



た白いネッカチーフ——そして、ブラシのきいた黒色のスーツに身を包んで満ち足りた様子の彼の姿——などを一目見るだけで、この拙い描写で伝えるよりももっと的確に、彼の真の人格がつかめるからである。

ニコラスは現在、少々場違いのところに置かれた気持ちである。彼は昔の議事堂のときのように、キッチンを眺めることができないのである。そこは以前、食器置場の窓が一つキッチンの方に通じていて、当時彼は、自分に質問する年若い議員たちの後学のために、一時間もぶっ続けで、シェリダンやパーシヴァル（スペンサー・パーシヴァル、1762—1812。優れた政治家で1809年首相となるが、狂った破産者によって下院のロビーで暗殺された。）やカーズレイ（本名ロバート・ステュアート、1769—1822。アイルランド生まれの国会議員で、1800年のアイルランド併合に尽力。晩年精神異常で自殺した。）、その他誰かれとうやうやしく名をあげられる人物について、心からの喜びを表して、どの下院議員を呼ぶにも必ず「ミスター」をつけて答えるのであった。

ニコラスは、彼と同年代の同じ地位にある人すべてがそうであるように、時代が墮落したという気持ちを強く抱いている。彼はめったに政治的意見を口にしないが、選挙改正法案が国会で可決される（1832年のこと）直前に、彼が徹底した改正論者であることを、われわれはどうか突きとめることができた。しかし、選挙法改正後の最初の国会が開かれてからすぐ、彼が頑固一徹のトーリー派であることを知って、われわれはあっ気にとられてしまった。奇妙きてれつな話だった。自分の意見を必要に迫られて変える人もいれば、損得を考えての人、さらに靈感を受けて変える人もいる。しかしニコラスが、いかなる形にしろ少しでも心変わりをするなどということは、夢にも考えたことはないし、どう考えてもあり得ない出来事であった。首都区住民に国会議員の選挙権を与える条項に、彼が強い反対意見を抱いていることもまた、まったく説明のつかないことだった。

われわれは、ついにその秘密を知った。——ロンドン区選出の議員さんきたら、食事はいつも家で取りなさんですからな。さもない人たちですよ。アイルランド人の議員の数を増やすってことですが、この方がもっとけしからん話です——こりゃ、絶対に憲法違反です。だって、あなた、アイルランドの議員さんがこちらに見えられると、一人でイギリスの議員さんの三人前

以上もお食べになりますし、ワインは飲まず、その代りテーブルビールを半ガロン飲んじゃうんですから。そして水割りウィスキーは、マンチェスター館（現在のウェストミンスター地下鉄の駅にあった）やミルバンク街（地方出身の議員が国会の会期中に利用していた下宿屋がた）にもどって飲みなさんです。だとしたら、どうなります？ さよう、商売は上がったりですな——ほんとうに——アイルランドさんが来てくれるお蔭でね。ニコラスというのは妙な老人である。彼は、議事堂自体がそうであるように、建物の一部になり切っているのだ。議事堂が火事に見舞われたとき、自分が馴染みの場所を離れて、あくる朝新聞の記事を読むことになるとは、彼自身少しも考えていなかったのではあるまいか。それは、炎が燃え盛っている階上の窓の一つに、黒い服を着た上品な様子の老紳士が現れ、床といっしょに燃え落ちるんだと毅然たる態度で言い放ったという、胸を打つ記事であった。彼は力づくで建物から連れ出されたに違いない。とにかく、彼は連れ出されたのである——彼はまたもどって来て、この前の会期から少しも変わらぬ素晴しくきちんとした身なりをして立っている。そう、毎晩、例のお決まりの場所に、前述した通りの彼の姿が見受けられるのである。奇骨のある人間が少なくなり、忠実な召使はそれ以上に希少になってきた現今、彼がいつまでもそこに姿をとどめてくれることを祈りたいものだ。

さて、キッチンのテーブルにつくと、部屋の片隅にあって盛んに火で焙られている焼串回転機——もう一方の端に置かれている、コップを洗ったりジョッキの中味を空けたりするための小さな台——聖マーガレット教会の絵が掛けてある壁の向かいの窓の上にある時計——ろうそくを置いた樅材のテーブル——ダマスク織のテーブルクロスとむき出しの床——食卓の上の金銀製並びに磁器製の食器、火にかけられた焼き網、そして他にもこのキッチンでしかお目にかかれない二、三の特別な調度類——といったものが当然目に入るわけだが、そこに居合わせている二、三の人物の方に目を向けていただきたい。彼らは、その身分と愚かな振舞によって刮目に値する存在なのである。

十二時半である。採決は一時間そこらありそうにもないので、議院内の酒場で立って酒を飲んだり、二階の議員席で居眠りするよりはと、数人の議員

がここに来てぶらぶら時間を過している。茶色に変色しかかった白い帽子をかぶり、ブーツの脛の中途あたりまでだらしなく垂れている黒いズボンをはいて、照返し(焼肉用の火の熱反射板。)にもたれかかって、自分が大した思想家であると自己欺瞞に陥っている、あの異様にぶざまでなさない様子をした人物は、その身に選挙区民の英知を結集している下院議員の素晴らしい見本である。かつらを御覧になっていただきたい。黒っぽい色ではあるのだが、それが何色であるとはっきり言えないのである。もとは茶色なら、長年の使用で黒っぽくなったと言えるし、もとは黒色なら、同じ理由でさめた茶色の色合になったと言えるからである。さらに注目されるのは、馬の目隠し皮のような大きな眼鏡が、この人物のすこぶる知的な顔の表情を大いに引き立てていることである。まじめな話、まったく救いようがないほどの愚鈍さをこれほど極端に示す顔、さらにまた、これほど妙ちきりんな取り合わせの身なりは、見ようと思ってもなかなかお目にかかれるものではない。彼はそれほど雄弁ではない。しかし、その彼が議会で演説に立つと、効果てきめん、いやおうなく人を信服させるのである。

今し方、この議員に挨拶をした鼻の尖った小柄な紳士は国会議員であり、元市参事会員であり、さらには素人消防士とも言える人物である。両院が大火に見舞われたとき、彼と有名な消防犬のはなばなしい活躍は衆目的となった——両者とも、自分たちが大変な善行を施しているのだとすっかり思い込んで、上に下に、中に外にと駆けずり回り、人の足の下にもぐり込んだり、皆の行くところに入り込んだり(原義では「誰もの邪(よこしま)の魔(ま)をする」の意。)、またやけに吠えたり喚いたりしていた。犬は消防ポンプとともに犬小屋に大人しくもどったが、紳士の方は火事から数週間、絶え間なく喚き続け、まったくの鼻つまみ者になってしまった。しかし、もう二度と議事堂が燃えるということにはなかったし、従って、額縁から切り外して絵画を守ったとか、他にも数々の立派な国民的奉仕をしたといったことを新聞に書く機会もなくなったので、彼は以前の落ち着きを少しずつ取り戻していった。

黒い服を着たあの女性——安息日法案の准男爵(アンドルー・アグニュー 准男爵 <1793-1849>のこと。彼は1833

年に安息日遵守法案を提出した（が、三期続けて否決された。）が今あごを撫でた方の女性ではなく、背の低い方——は、「ジェイン」、ベラミーのヘーベ（ギリシャ神話のゼウスとヘラの娘で、青春の女神。神々の酒宴の取り持ち役であったことから、俗に「女給」）である。ニコラスに劣らず、ジェインも彼女なりに、なかなかの器である。彼女の主たる特徴は、自分のところにやってくる大多数の客を、完全に蔑んでいることであり、彼女の性質でいちばん目立つのは、人からちやほやされて嬉しがるところである。そばにいる若い議員が彼女の耳に何かよく分からないこと（というのも彼の言葉が何らかの原因で少し濁っているからである）をささやくと、それに彼女が嬉しそうに耳を傾けたり、答える代りに、自分にかけている議員の腕にフォークの柄をふざけて突きさしたりするのを見れば、誰だってそれに気づくはずである。

ジェインの当意即妙のやりとりはなかなかのもので、まったく遠慮容赦なく、あけすけな言葉をぼんぼんと相手に浴びせるので、それを初めて耳にする人は、時どき少なからぬ驚きを覚えるのである。彼女はニコラスにも冗談をとばすが、彼に対しては深い敬意を抱いている。こうした冗談を受けても、また時おり廊下で彼女が田舎踊りよろしくふざけてはね回って見せる（ジェインの唯一の楽しみで、これがまた無邪気なのである）のを眺めていても、表情一つ変えないニコラスの鈍重さは、なかなかに楽しい彼の個性の一端を示すものである。

部屋の向こう側の隅の食卓についている二人の人物は、長年にわたってこの常連であった。そのうちの一人は、輝やかしい時代のもっとも輝かしい人たちと、この部屋で幾たびも饗宴を共にしてきた人物である。その後彼は上院の方に行ってしまう、彼の陽気な飲み仲間の大半は、ヨリックの運命（『ハムレット』, v. i. 王の道化で、奇想天外のしゃれをほしいままにして「食卓を（どっと笑わせた）」ヨリックも骸骨となって腐り果てなければならない人生の無常。）を辿ることになった。彼がベラミーを訪れるのもかなり間遠になってしまった。

彼が今ほんとうに夕食を取っているのであれば、いったい何時に午餐を済ませたのであろうか。二枚目の分厚いしり肉ステーキが皿から消えてしまった。彼は、窓の上に掛かっている時計ではかると、四分四十五秒で一枚目を平らげている。フォールスタフ（『ヘンリ四世』などに登場する、陽気で機知に富んだ大食漢。）ここにありである。

ステーキの余分な肉汁を受けるためにあごの下に当ててもらったナプキンを取り外しながら、あのスティルトンチーズ(イギリス産の味の濃厚なチーズ。)をほくほく顔で眺める様子や、しろめのポットに入れて、特別彼のために持って来させた黒ビールをいかにもうまそうに喉に流し込むのを見たり、どんどん詰め込むこってりした食べ物やがぶ飲みする濃厚なワインが、まさに押しつぶしてしまったようなあのしゃがれ声を聞けば、これこそ誠の美食家グルマンの、まがう方なき化身だと言えるであろう。彼の姿を見れば、シェリダン(既出)が議会仲間と催した大酒宴の片棒を担いだのがまさしくこの人物であること、また自分を乗せて帰る貸馬車の御者を自ら買って出たり、自らを忘れて酒宴をおちこわしてしまったのが誰であるかは、言わずと知れたことである。

この人物の声や風采は、同じテーブルに座っている老人の貧弱な身体やきーきー声と実に面白い対照をなしている。彼は、ちゃぼのような小さくかん高い声をいっぱい張り上げて、何を言うにもまず自分や相手の目をののしってから(原語の 'damn one's eyes' (「ちくしょう」) 始めるのである。「大将」(彼の通称である) は、ベラミーの昔ながらの常連で、「議会が始まる」とここに居座わる悪癖があって (ジェインには救い難い罪に見える)、 さながら人間酒樽のように、水割りした火酒を身体に流し込むのである。

この老貴族——というか老人——というのは、彼が貴族になったのは最近のことだからである——は、大コップ一杯のホットボンチを注文して、またまた目をののしってからそれを飲み、飲んではののしり、そして煙草をふかす。議員たちが次つぎと忙しげに駆けつけて来て、「大蔵大臣が着席した」と報告し、採決の時の力づけに水割りブランデーを引っ掛ける。夕食を注文した議員たちが、それを取り消して下の議場に向かいかけると、突然ベルがけたたましく鳴り出し、「さーいけーつ、！」という叫び声が廊下に響く。もう待ったなしだ。議員たちはあたふたと議場に向かって突進する。またたく間にキッチンから人の姿が消え、騒音が急速に遠のいていく。最後の議員のブーツが、階段の最後の一段をきしませる音が聞こえ、われわれは特大のしり肉ステーキを前にぼつんと取り残される。